

4 競うことで磨かれ、継承される バリ島の芸能

「神々の島」「芸能の島」と称されるインドネシア・バリ島は、現地で信仰されているバリ・ヒンドゥーの儀礼やその祭礼で行われるガムラン演奏や舞踊が有名です。バリ島では伝統芸能の保存のみならず、それらを発展させ、未来につなげるために地域、教育機関、行政が連携し伝統芸能を支援しています。ここでバリ島の芸能の事例を紹介することで、アジアや日本の伝統芸能の継承のヒントに繋がればと考えております。

1 バリ・ヒンドゥーの儀礼と地域における 芸能の活動

インドネシア共和国は島嶼国家として知られ、それぞれの島に多くの民族が住んでいます。またインドネシア国民の大多数はイスラム教を信仰していますが、バリ島では90%以上の人々がバリ・ヒンドゥーを信仰しています。バリ・ヒンドゥーは神々のための祭礼以外に、人間の通過儀礼、地下に潜んでいる悪霊を鎮めるための儀礼が行われ、沢山の供物とともに音楽や舞踊が奉納されます¹⁾。

これらの宗教儀礼は主に地域の共同体において行われ、儀礼に欠かすことのできない音楽や舞踊

は、共同体を中心に伝承されてきました。バリ島の打楽器アンサンブルであるガムラン音楽は、スク・ゴン sekehe gong と呼ばれる集落のグループで継承されており、地域の寺院の祭礼時に演奏を担当します。バリ島の集落の集会所にはゴング・クビヤール gong kebyar と呼ばれるガムランが置かれ、青年会、婦人会、子供会など複数のグループで、寺院の祭礼が近づくと、週に1~2回、夜に集まって練習が行われます。

ゴング・クビヤールというガムランは、1910年代にバリ島北部のシンガラジャという地域で誕生し、ダイナミックな演奏スタイルで人気を博しました。そして1980年代になると、バリ島のほとんどの集落にゴング・クビヤールが設置されるようになりました。

2 芸術教育機関による 音楽・舞踊のスタイル

バリのガムラン音楽は、基本的に楽譜は用いず、口頭で伝承されています。そのため同じ曲であっても、地域や年代、教える人によって多少の違いが見られます。2015年にユネスコの無形文化遺産として登録されたレゴン・クラトン legong keraton という舞踊も地域によって異なるスタイルがあり、いくつかのグループがその独自のスタイルを保持しています。しかしその一方で、現在多くの地域で伝承されているレゴン・クラトンは芸術教育機関が創作したスタイルの舞踊です。

バリ島では1960年に国立芸術高校が設立されたのをきっかけに、様々な地域のスタイルを混合した音楽や舞踊が創作されました。そのような音楽や舞踊は、「アカデミックなスタイル/芸術教育機関のスタイル」と呼ばれています。芸術高校の教員や学生が授業の一環でバリ島各地の集落に



写真1 ゴング・クビヤールの練習風景

それらを教えた結果、画一化された舞踊や音楽がバリ島各地に広まっていきました²⁾。芸術教育機関のスタイルは、地域の特色を均質化させるという側面もありましたが、そのスタイルは洗練され、上演時間も短縮されるという利点があり、バリに定着していきました。

3 私設団体・サンガルsanggarの出現

1990年代に入ると、サンガル sanggar と呼ばれる私設の芸能団体が設立されるようになりました。既に述べたようにバリ島の芸能は、集落単位で伝承され、その地域の住民によって行われてきました。一方サンガルは、地域の枠にとらわれず活動が行える団体です。サンガルのリーダーとなる人物は、芸術教育機関を卒業したものが多く、楽器や舞踊の衣装などを個人で所有しています。またサンガルでは、舞踊やガムラン音楽の教室を開いています。スク・ゴンでは男性と女性が一緒に演奏することはありませんでしたが、サンガルでは年齢や性別に関係なくガムラン音楽が学べます。近年、若い女性のガムラン奏者の活躍が目立っていますが、それはサンガルによる教育も影響しています。

4 様々な芸能コンクール

—— 芸能は競いあうことで磨かれる

(1) 学校対抗のコンクール

バリ島では祭礼に関する芸能活動以外にも、様々な場で芸能が披露されています。その代表的な場が芸能のコンクールです。

コンクールはインドネシア語でロンバ lomba と呼ばれ、文化局が主催する学校対抗のロンバやバリ芸術祭の中で行われる各種のロンバなど、頻繁に開催されています。学校対抗のロンバでは、芸能に長けている生徒が代表として参加し、舞踊やガムラン音楽の技術を競います。ロンバは、小学生、中学生、高校生など年齢や芸能のカテゴリーによって部門が分かれ審査されます。またロンバに参加し、上位入賞を果たすと、進学の際、内申



写真2 学校対抗のロンバの様子

点が上がるという利点があります。このようにバリの社会では芸能の伝承者が不足しないように、行政と教育機関が連携し芸能を学ぶメリットを設けているのです。

(2) バリ芸術祭の目的と経済的な効果

バリ芸術祭は1979年、当時バリ州知事であった、イダ・バグース・マントラの呼びかけによってはじめられました。現在バリ芸術祭はバリ州文化局が主催し、毎年6月から7月の1ヶ月間、音楽や舞踊のコンクール、工芸品、絵画などの展示や販売、伝統衣装のファッションショー、芸術に関するセミナーなど様々な催しが行われます。バリ芸術祭の目的は、伝統芸能の保存と後継者の育成です。舞台ではバリ各地で伝承されている希少な芸能が披露され、その参加団体には準備金が支払われます。また伝承が途絶えそうな芸能も定期的に舞台で披露する機会を設け、後継者を育てる工夫がなされています。その際、バリでは伝統芸能をこれまでと同じような形で披露するのではなく、アレンジを加えるなど変化をつけて上演します。これは、舞台上の演出効果だけではなく、芸能に新しい要素を加えることで、後継者に親しみをもたせ、継承を続けさせるというねらいも含まれています。またバリ芸術祭では、大規模な地域対抗形式のロンバが開催されています。その中でも人気があるのは、聖獣であるバロンの演舞とブレガンジュールというシンバルを中心とした演奏で、毎年新作が披露されています。これらのロンバの審査基準は楽器の演奏や舞踊の技術の他に、

衣装の着こなし、演奏をする時に付随する振り付け、楽器の音色が含まれます。それに伴いバリ芸術祭は経済的な効果も生み出しています。ロンバに参加する団体は、本番の舞台で着る衣装を準備する必要があり、この時期、町の仕立業者は忙しくなります。更に本番に使用する楽器はメンテナンスが必要となるため、楽器の修理に携わる職人の仕事が増えます。またプレガンジュールに使用する楽器の購入も増加するため、楽器工房にも注文が増えます。そしてロンバで披露する楽曲や舞踊を創作した芸術家や指導者、出演者には報酬が支払われ、芸能に携わる人に利益が得られるような仕組みになっています。しかしバリ芸術祭には負の側面もあります。本来バリ島の芸能は共同体のメンバーで行われ、神々に奉納されるために行われてきました。奉納のための芸能は、技術の高さが重要ではなく、地域の住人誰もが参加できることが重要でした。しかし大きな舞台やコンクールという形式で芸能が披露されると、高度な技術や芸術性を追求する作品が増え、一般の観客から共感が得られず、ロンバにおいて一度のみ披露される作品が増加しました。また入賞にこだわるあまり、自分たちの地域で伝承されてきた芸能のスタイルを変化させるということが起こりました。このようなマイナスな側面も見られますが、バリ芸術祭とロンバは、バリ島の芸能の継承と発展において非常に大きい役割を果たしているといえます。

5 新しい機器を使用した 伝統芸能の学習方法

バリ島のガムラン音楽は、曲を習得する際、パートに分かれず、メロディーやリズムの句切れの良いところまで全員で練習するため効率的とはいえません。筆者がガムランを習い始めた1990年代、外国人はカセット・テープやMDを用いて、先生の演奏を録音し、曲を習得していました。一方バリの人々は、録音機器を所有している演奏家は少なく、新しい曲は練習場で記憶するの



写真3 携帯電話とスピーカーを用いた太鼓の演奏

みで、家で個人で練習をするという習慣はありませんでした。

しかし2000年代に入ると、バリの人々の間でも携帯電話が普及し、芸能の録画や録音が容易になりました。特に新型コロナウイルスが流行した2019年以降は、様々な楽器の演奏方法がYouTubeにアップロードされ、芸能の学習に活用されました。サヌール市在住の太鼓の名手である、イ・ワヤン・ムルタ氏によると、コロナ禍に多くの学生が課題の作成のために彼の自宅を訪れ、太鼓の演奏法についてのインタビューと実演を録画したといます。通常、太鼓の演奏には旋律を演奏する楽器が必要です。しかし学生たちはガムランの旋律を、あらかじめ音楽制作ソフトでプログラミングし、その音源に合わせてムルタ氏に太鼓を叩くようお願いしたそうです。ムルタ氏は、師匠から対面で楽器を学ぶという伝統的な方法でガムラン音楽を学習してきましたが、プログラミングされた音楽に合わせて太鼓を叩くということに抵抗がなく、「旋律楽器を演奏する人がいなくても、携帯電話と小型のスピーカーがあれば、一人でも練習ができる。それが新しい機械を使用する利点の一つだ」と語っていました(写真3)。

またベルギーのインドネシア大使館で23年間勤務していた経験をもつイ・マデ・アグス・ワルダナ氏は、ガムランの練習や新しい作品の創作にループステーションを活用していました。ワルダ



写真4 ループステーションを使用するワルダナ氏

ナ氏は、ベルギー滞在中に、近隣のヨーロッパ諸国でもガムラン音楽のワークショップを行っていましたが、演奏者の育成に時間がかかるため、一人でガムラン音楽を演奏できないか考えていました。そこでガムラン音楽の複数のパートを口で歌い、多重録音することで、パフォーマンスを行うことを思いつきました。特にコロナ禍では、ループステーションを用いて楽曲を作成し、自ら道化の仮面を被ったパフォーマンスをYouTubeにアップロードしたことで、世界中のガムラン愛好家の間で有名になりました。

またワルダナ氏は、筆者に太鼓を教える際、使用する旋律をループステーションに録音し、それに合わせて練習するという方法を取りました(写真4)。ワルダナ氏は「太鼓は通常旋律を歌いながら教えるので、とても疲れる。しかしループステーションで旋律を予め録音し、それを用いることで疲労が軽減した。ループステーションを使用すれば、たとえ家に楽器がなくても擬似的にアンサンブルの練習が可能だ」と語っていました。

このようにバリの演奏家は伝統芸能の学習にも積極的に新しい機器を使用し、時代に合わせて指導法を変化させています³⁾。

6 おわりに

これまで述べてきたように、バリ島は地域、教育機関、行政が連携し伝統芸能を支援していま

す。また伝統芸能のあり方やその指導方法は時代に合わせて柔軟に変化しています。本稿ではバリ島の伝統芸能の継承とコンクールの事例について取り上げましたが、この事例が様々な地域の芸能の継承を考える際のヒントになれば幸いです。

- 1) 吉田禎吾監修、河野亮仙・中村潔編(1994)『神々の島 バリーバリ=ヒンドゥーの儀礼と芸能』, 春秋社。
- 2) 梅田英春(2010)「バリ舞踊レゴン・クラトンにみるインドネシアの文化政策」皆川厚一編『インドネシア芸能への招待—音楽・舞踊・演劇の世界』, 東京堂出版, 155-174 ページ。
- 3) 2023年3月, 筆者が行った現地調査の情報。

【参考映像】

イ・マデ・アグス・ワルダナ氏の映像作品

Ciaaattt...Gamut (Gamelan Mulut) Vs Man Kenyung

<https://www.youtube.com/watch?v=07G6eokfD3A&t=102s>

(2024年9月30日閲覧)

(鈴木良枝)